

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320122

研究課題名(和文) 海外における日本近現代史像の変容－学校教材を中心に－

研究課題名(英文) Change of the modern Japanese historical image in foreign countries.

研究代表者

三宅 明正 (MIYAKE, AKIMASA)

千葉大学・人文社会科学部研究科(系)・教授

研究者番号：30174139

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：この研究は、海外における日本の近現代史のイメージが、20世紀末から21世紀にかけて、どのように変容したのかを、学校の教材を用いて考察したものである。西欧と、中東、南アジア、東アジア、アメリカの諸国を、検討の対象とした。この研究の目的は、今後の日本近現代史研究を、広く海外の研究者と協力して進めていくための視点を探ることであった。具体的な研究作業を通して、複数の重要な知見を売ることができた。研究成果報告書は、冊子体で作成した。

研究成果の概要(英文)：This research considers how the image of the modern history of Japan in overseas changed from the end of the 20th century to the 21st century using the school textbooks. We set the countries in Western Europe, Middle East and South Asia, East Asia, and the United States as the object of examination.

The purpose of this research was to explore the viewpoint for advancing future Japanese modern history research in cooperation with the overseas researcher widely. We acquired new knowledge through concrete research work, and made the booklet as the result of research.

研究分野：日本近現代史

キーワード：近現代史 グローバル化 教科書 比較歴史学

1. 研究開始当初の背景

(1) 海外における日本近現代史像を振り返ると、1960年代までは著しく異なった社会・文化という日本像が主流であったが、1970年代からは、日本の経済成長を反映して、他文化・他社会との共通性を踏まえた日本の近現代史というとらえ方が流布するようになった。もちろん日本の特殊性に着目する潮流も強く、これらもあいまって海外における日本近現代史の研究者は急増し、世界的な共通性を基礎にして日本の特性を把握しようとする高い水準の研究が現れて、世紀転換期には日本近現代史研究が2年連続してピューリッツァ賞をとるまでになった(Dower1999, Bix2000)。

(2) いっぽうで1980年代に始まった台湾・韓国・中国などの経済発展は、東アジア研究全体の隆盛をもたらした。そのなかで狭義の日本研究は、関心の拡散が顕著となった。旧来は、日本的経営や労使関係など、経済・経営面を中心とした日本研究が数多く見られたが、1990年代以降はさまざまな分野にわたり、日本近現代史研究も、視点と方法の両面から多様化を進めつつある(三宅 2001、2008)。

2. 研究の目的

(1) 以上に述べた研究開始時の状況を踏まえて、本研究は海外における日本近現代史像が20世紀末から21世紀にかけてどのように変容したのかを考察し、各地における日本近現代史像の来歴を整理して検討することで、国際的な日本近現代史研究の展開のための視座を探ることを目的とした。

(2) その際、教科書などの学校教材を直接の対象とした。理由は以下の2点である。第一に、日本近現代史像をとらえる上で、一定の基準でその推移をみるには特定の対象設定が必要であり、学校教材はそれに適している。本研究のように多様な国や地域の事例を扱うには、とくに比較対象が可能な素材として学校教材は適切である。第二に、これは国によって異なるが、1990年代以降海外の学校教材は歴史研究者にとどまらず広く社会の関心や動向を反映しやすくなっており、その点でも妥当であると考えた。

3. 研究の方法

(1) 本研究の具体的な作業は、対象とする各地域の学校教材ならびに関連資料を調査して収集し、これらを分類・整理して、そこにおける日本近現代史像の特徴を明らかにすることである。調査対象とした国と地域は、西欧(オランダ、ドイツ)、中東(トルコ)、南アジア(インド、シンガポール)、東アジア(中国、台湾、韓国)、アメリカである。

(2) 収集は、文献や資料の購入、現地調査、

図書館や資料館の調査という形で遂行した。日本国内で収集できる文献や資料は国内で集め、海外での調査は当該地の研究者の協力を得るよう努めた。

(3) 作業を計画的に遂行するために、研究代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者を、対象とする地域別にグループ組織に分けて、作業は基礎的にはこのグループ単位で薦めた。

(4) グループは、当初は北米・西欧、中東・南アジア、東アジアの3つで発足した。ただし研究代表者が2012年末から2013年5月まで、デリー大学に客員教授として招聘され現地に滞在することになり、インドでの資料調査が飛躍的に進んだこと、作業の進展から中国が他の国々と異なる特徴をもつことが明確になったこと、などから、中途からグループを北米・西欧とアジアの2つにして進めた。

(5) 研究代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者の相互連絡は、研究会の他、日常的にはe-mailによって行い、研究進捗状況の相互確認に努めた。

4. 研究成果

(1) 最終的な研究成果報告書は、このweb版とは別に、冊子体の論文集を作成した。以下には、まずこの研究で明らかになった点を、全体として新たに得られた知見に即して述べ、次いで20世紀から21世紀にかけての教科書記載の日本近現代史像に変化が際立つ中国の事例を取り上げてその内容を検討し、最後に本研究を通して今後の課題として明確になった点を記すこととする。

(2) 新たに得られた知見は、まず第一に、歴史教科書に占める日本の比重が相対的に小さくなった点である。国や地域による違いはもちろんある。従来は明治以降の産業化と昭和期の軍事行動、そして第二次世界大戦後の経済成長などが記載されることが多かった。最近では東アジア諸国の歴史が充実する一方で、結果として日本関係の記述が少なくなる傾向がうかがわれる。この背後には、東アジア諸国の経済成長と、1990年代以降の日本の経済的位置の低下があるとみてよいと思われる。

(3) 第二に、従来は日本の近現代史をもっぱら日本一国の問題としてとりあげ、東アジア諸国との関係は戦争や植民地とのかかわりで取り上げていたが、最近では東アジアというくり方が現れてきていることである。経済成長を遂げる(た)東アジアというイメージの強まりが、そうしたくり方を生み出しているようで、その傾向は今後さらに広まると考えられる。

(4) 第三に、工業化と戦争という日本近現代史像にとどまらず、文化や社会的な変化を記載した例がでてきていることである（インド、中国など）。日本ないし日本史をステレオタイプ化した文化の型として描くのではなく、変化するものとしてとらえようとする記述は、事例は少ないものの、新しい傾向として注目される。

(5) いま上で述べた点に関わって、20世紀から21世紀にかけて、日本近現代史の記載量が明確に増大したのは、中国の歴史教科書である。

そこでは、第二次世界大戦前ならびに戦時中と、戦後とが、明瞭に区分されて、とくに戦後日本の経済成長を扱った記述が飛躍的に大きくなった。これは中国の経済成長政策が、日本の成長を強く意識しながら進められたこととかかわって来よう。

一般に中国の歴史教科書については、戦時中の日本軍の残虐行為の記載が増大したと言うことだけが強調されがちだが、それ以上に戦後の日本の経済成長や人々の暮らしと意識の変化（平和主義）が相当量記載されるようになったことや、戦前・戦中と戦後とをくっきりと区分する記載が一般的になったことには、もっと注意が払われるべきであろう。

(6) 最後に本研究の遂行から今後の課題として明確になった点を列記する。

第一に、歴史の理解の仕方の多様性という点である。一例を挙げると、歴史教科書は「通史」の典型だという主張がなされることが多いが、実はこの「通史」という歴史の理解の仕方は、漢語圏に特有のものであって、一般的なものではないということである。「通」の文字が含意する、「つながった」歴史という理解自体が特定の文化的背景によるものにほかならない。このような理解の仕方の違いを明確にしつつ、共通する理解の仕方をどのように展望できるのか、これからの課題の一つである。

(7) もうひとつは、経済成長する（した）東アジアという歴史のイメージに関する点である。

(8) 中国の教科書で日本についての記述が増えた点は先に述べた。とくに戦後の時代がふえ、高度経済成長が農地改革、政府の経済計画、技術の導入、教育の広がり等と深く関わっていることなどが記載されるようになった。これには現代中国の経済成長政策との関連が背景にあると思われる。

他の国の教科書もそうだが、こうした日本の経済成長について、東アジア（やその他の国々）の経済成長のそれと何が共通してどこが異なっているのか、触れられることが

ない。だがそれぞれの経済成長の内実を見ると、たとえば社会の平等／不平等や、食料生産と自給、工業生産に占める軍需の比率など、日本の特徴という点で注目すべきところが少なくない。これらの中には21世紀の私たちが解決を迫られている論点があり、その究明はこれからの課題である。

<引用文献>

John W. Dower, *Embracing Defeat*. W.W.Norton and Company.1999

Herbert P. Bix, *Hirohito and the Making of Modern Japan*. Perennial.2000

三宅 明正、戦後期日本の労働史研究、大原社会問題研究所雑誌、No.510、2001、17-30

三宅 明正、諸外国の日本同時代史研究、同時代史研究、No.1、2008、14-21

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計16件)

三宅 明正、海外における日本近現代史像の変容 歴史の教科書を素材にしてー、2012-2015 年度科学研究費基盤研究(B) 課題番号 24320122 研究成果報告書、査読無、2016、3-10

今野 日出晴、中国の歴史教科書における日本史像ー戦前の日本と戦後の日本との断絶、2012-2015 年度科学研究費基盤研究(B) 課題番号 24320122 研究成果報告書、査読無、2016、11-31

今野 日出晴、アクティブ・ラーニングという幻惑、歴史評論、No.791、査読無、2016、44-56

今野 日出晴、教科書は何に依拠して書かれるべきか、教育 No.836、査読無、2015、40-45

水島 治郎、「尊厳ある生活」のために、千葉大学法学論集、Vol.30,No.3、査読無、2015、1-20

Akimasa MIYAKE、Review Article: The Social History of Postwar Japan, Vol.1, *Changing Society Changing Individuals: Japan's Postwar 20th Century*, Social Science Japan Journal, Vol.18 No.1、2015、109-112

今野 日出晴、歴史認識を深めるために、中等社会科教育研究、No.32、査読有、2014、3-15

今野 日出晴、<歴史実践>の場としての旧満州、星火方正、No.19、査読無、2014、15-24

水島 治郎、「理想の国」のポピュリズム、千葉大学法学論集、Vol.29、No.3、査読無、2014、1-21

三宅 明正、「通史」への疑問、千葉史学、No.63、査読無、2013、1-6

三宅 明正、「誇りうる歴史」とは何だろうか、東書eネット、2013-3、査読無、2013、1-2

栗田 禎子、エジプト「6月30日革命」とオリエンタリズムの罫、歴史評論、No.763、査読無、2013、53-62

栗田 禎子、エジプト革命第二ステージをめぐる心理戦、唯物論研究年誌、No.18、査読無、2013、156-172

今野 日出晴、「歴史意識」を考えるためにー「現代とは何か」という問いかけからー、歴史学研究、No.899、査読有、2012、9-16

栗田 禎子、南スーダン独立を読む、歴史と地理、No.659、査読無、2012、1-14

〔学会発表〕(計7件)

Jiro Mizushima、Immigration Labour and Women in Western Europe、東アジアにおける移民とジェンダー、労働に関する国際会議(千葉大学で開催)での報告、2016年2月19日

Akimasa MIYAKE、Social Transformation during the High-Growth Era in Postwar Japan、Development Alternative 主催の国際会議 Inequality of Developing Asia (インド、ニューデリーの India International Centre で開催)での招待講演、2015年10月3日

今野 日出晴、「被爆者の声」その力、長野県飯田市歴史研究所での招待講演、2014年8月23日

今野 日出晴、<歴史教師>の不在 なぜ「歴史教育」なのかー、歴史学研究会大会(駒澤大学で開催)での招待講演、2014年5月24日

Akimasa MIYAKE、Japanese overseas Students in India in the 1950's、国際交流基金ニューデリー・レクチャーシリーズ、(インド、国際交流基金ニューデリー事務所

で開催)、2013年4月22日

栗田 禎子、現代史とは何か、歴史学研究会創立80周年記念シンポジウム(明治大学で開催)での招待講演、2012年12月15日

Akimasa MIYAKE、East Asian History - Korean High School New Curriculum、韓国政府機関共催の Jeju Forum (韓国、済州島のホテルで開催)での招待講演、2012年6月1日

〔図書〕(計7件)

Wolfgang Seifert 編 Akimasa MIYAKE など計30人の共著、IUDICIUM 刊、Japan und das Problem der Moderne、2015、515(三宅の執筆は144-150)

今野 日出晴ほか9人、岩波書店、アジア太平洋戦争戦後編、2015、290(今野の執筆は99-128)

Yoshiko KURITA、Calkins Ile ほか、Langaa Research and Publishing CIC 刊、Emerging Orders in the Sudans、2015、本人担当は25-38

栗田 禎子、大月書店、中東革命のゆえ、2014、267

栗田 禎子ほか、東京大学出版会、歴史学のアクチュアリティ 2013、栗田の担当は87-104、

水島 治郎、岩波書店、反転する福祉国家 オランダモデルの光と影、2012、238

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三宅 明正 (MIYAKE, Akimasa)
千葉大学・人文社会科学研究科・教授
研究者番号：30174139

(2) 研究分担者

今野 日出晴 (KONNO, Hideharu)
岩手大学・教育学部・教授
研究者番号：10380213

水島 治郎 (MIZUSHIMS, Jiro)
千葉大学・法政経学部・教授
研究者番号：30309413

栗田 禎子 (KURIYA, Yoshiko)
千葉大学・文学部・教授
研究者番号：00375601

(3) 連携研究者

秋葉 淳 (AKIBA, Jun)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：00375601

趙 景達 (CHO, Kyeungdal)
千葉大学・人文社会科学研究科・教授
研究者番号：70188499

(4) 研究協力者

J. Victor Koschmann
コーネル大学・歴史学部・教授
アメリカ合衆国

Wolfgang Seifert
ハイデルベルク大学・名誉教授
ドイツ

Brij Tankha
デリー大学・前教授
インド

長谷川 亮一 (HASEGAWA, Ryoichi)
千葉大学・人文社会科学研究科・特別研究

員